

人生を拓く

55

竹部好子さん(84) 北町2

大正年間に四国出身の祖父母が旧空知郡山部村(現富良野市東山西達布地区)に入植。開拓2代目の父、大屋直一(没年不詳、70歳で逝去)、ふみさん(同、死亡年齢80歳代)夫婦の10人兄弟の9番目として生まれ育ちました。

11歳で太平洋戦争終戦を迎えました。新制中学制度への移行期でしたが、国民学校高等科の修了と記憶しているそうです。

「親が行けなかったせいか、私は行かせてもらえた」。卒業後は「兄に怒られながら馬の鼻持ちをしたり、畔草を刈って馬の餌にあげたりして手伝っていたよ」。

田んぼは6反(約60ア)の傾斜地で、「山坂でね、りんごを植えていたけれど、物心ついたころは木の根がごろごろしていた」と開拓は苦労続き。4番目、5番目、6番目の兄が中心になって営んでいたそうです。

1953(昭和28)年、19歳の時、木工場の工場長だった兄の薦めで、鋸の目立て技師として会社の泊まり込んでいた23歳の貢さん(平成12年、71歳で没)と見合い結婚。1960(昭和35)年、貢さんの出身地・東川に転居し、1男2女を生み育てました。貢さんが



作った屋台庫(リヤカーの台車部分に上屋根を付けたもの)に幼子に乗せて本家を手伝い、農家の出番仕事をしました。その間、当時人気だった編み物を独学で学んで編み物教室を開くほどの腕前に。

長男(現在56歳)が小学校に入学した1968(同43)年、現在地に宅地を購入して自宅を建て、3人の子育てに奮闘しながら生活に張り合いが出るように。

貢さんは各地の木工場に鋸の目立てを請け負って出向く生活。好子さんは、自宅の前に店舗建物を建てて寄せ場にし、持ち前の明るさと姐御肌で出番さんを取りまとめ「通称、竹部組」と呼ばれるように。「東神楽、西神楽に行く日は、子供が熱を出しても途中で帰れないですよ。枕元にいつぱいお菓子を置いて出掛ける日もあったよ」。

農閑期はスーパーマーケットや農協ストアで、農繁期には田植えなど農家仕事で一家を支えて72歳まで現役で働きました。その後本格的に習い始めた大正琴は、22年のキャリアを持つ琴城流名取。年の瀬を迎え、新春弾き始め会に備えて、今年もお稽古に忙しさを増し始めました。

俳句

置炬燵今はなつかし足喧嘩

新潟の土付き届くさつまいも

病夫への悔やむ一言冬の薔薇

木漏れ日に恋した紅葉の物語

芋茎千すあの頃の父と同じ齡

月冴ゆる火星はどんだん遠ざかり

生命のかくも軽きや糸とんぼ

月光やサマルカンドに眠る王

群青は空に放たれ北帰行

虎落笛やわらかな産毛すり抜けし

秋の池すべてをいだし静かなり

母の手は記憶のままに毛糸編む

木の葉のせ狸が化したポストかな

新米の湯気の香りの家族かな

「落穂拾い」母の形見の五円玉

ルーペ当て樹の肌覗く小春の日

杉山 ひろのり

保科 なほ

杉山 りつ

こばやし 星来

横田 則子

高瀬 潤

徳光 吐苦

三島 智

若田 郁

本田 咲

斎藤 夕桜

山内 みゆ

八田 昌代

由川 真人

小林 ろば

石澤 清宏

